

発散された人間の欲望とその残滓。取手駅東口に降り立つと、日本のどこにも見られる、いくつかの計画の錯綜し衝突し行き場を失って力尽きた様子が目に入る。展示会場を目指して、駅前のカタクラショッピングプラザへ向かう。杉山啓子が展示を行ってきた場所は、現在そこが美術展用のスペースになっていたとしても、もともとは異なる用途のために作られ、そのように使われていた所が多い。この建物もかつてはイトーヨーカ堂だった。ギャラリーのある5階は、主にレストラン街として、また、書店や文具売場、美容室、ゲームコーナーのあるフロアとして機能していたらしい。現在同フロアは、ゲームコーナーをメインに、レストラン、喫茶店、取手市役所取手駅前窓口などで構成されている。悪く言えばそのように雑然とした、誰もこんなところにギャラリーがあることなど期待していない場所に、まるで仮設小屋のようにサテライトギャラリーはある。そしてもちろんそこにこそ、このギャラリーの特徴と、企画者の意図があるはずだ。その意図自体、眩しい存在である。もちろんここにギャラリーがある必然性はないだろう。だがここにギャラリーがあることで、運営者側にも来場者にも、予測しなかった視点、変化の生じる可能性がある。

なんらかのエピソードのある場所での展示を意識的に続けてきた彼女の作品はいつでも、植物の花弁や種子をモチーフにしてエッチングで和紙に刷られた複数の銅版画が、壁面や天井に、数点のパーツを組み合わせるかたちで配置される。見る者は会場で、それら作品に囲まれる。ただ過去に一度、同種の版画を組み合わせてドレスを作ったことがあった。それが2002年のZa Gallery 有明での展示。会場は、ワンザ有明ベイモールという、ベイエリアのファッションなショッピングビルの一角にあるアート・ショップ併設のスペースだった。そしてそのショウ・ウィンドウ内に数着のドレスがディスプレイされたのである。

そして今回、2度目のドレス作品の展示となった。閉ざされた空間の、人ひとり入れるくらいの小さな入口の前を通ると、視界の片隅に赤い色が映る。そしてそちらに目をやると、赤いドレスが一着ポツンと立っている。中に入りドレスの周りを一回り、二回り……。それは空間と緊密に緊張を保っているという雰囲気ではなく、むしろ、白い壁に遮られた広いスペースに取められ、拠り所となる誰かを待って所在なくたたずんでいるように見える。ガラスの靴が、シンデレラという灰まみれの女性だけを待っていたように、ドレスは空虚な人型で、誰でもない誰かを待っているという、そんな気配。

「red dress」というタイトルに注目してみるとそれは、植物分類のための学名表記を思わせる二語、しかも音の重なる二語である。red (アール・イー・ディー) とdre (ディー・アール・イー) の繰り返し。作者は、個々の版画の表情の違いに気をつけて、一枚一枚を刷っていくという。確かに、ひとつひとつ見ていくとそれぞれの色も刷り具合も違う。手仕事による刷りが個性を産む。影響を受けたというウィリアム・モリスの植物模様の壁紙は、植物が絡み合い織り込まれたテクスチャー柄で構成されている。杉山啓子の版画の植物は、テクストを編まず、ペタペタと貼り付けたり集めたりすることによって成り立っている。「花びらが吹きだまったようにしたい」と作者は言う。複写、反復、貼付、などと頭の中で繰り返しているうち、その形態にも影響されて、花弁が染色体のように見えてきた。彼女は、受け継いだものがうつされ遺伝するというようなことを、作品にこめたりしてはいないのか？ 第一、花のインスタレーションという時点ですでにこれは何かの儀式だったりしないのか？ 何か、誰かへの献花？ ドレスは、下向きのラッパ型、漏斗状の大きな花弁にも見えた。

言水 へリオ (『etc.』発行人)

red dress エッチング、和紙 2006年

